ではないと考える。即ち，山形猪鹿狼氏，木通邦武氏及び筆者の觀察した所に據れば，本藻は他物に固着生活はせず水中に浮泛生活をして居るからである。

參　考　文　獻

1. Suringar, W. F. R.——Illustration des Algus du Japon. 1872. 2. 大野直枝——松村任三博士編，帝國植物名鑑，1904. 3. 遠藤吉三郎——海產植物學，1911. 4. 東道太郎——岡村金太郎博士著，藻類名彙，1916. 5. 川村多實二——日本淡水生物學，1917. 6. 岡村金太郎——藻類系統學，1930. 7. 山田幸男——分類植物學，1935. 8. 岡村金太郎——日本海藻誌，1936. 9. 山形猪鹿狼——熊本縣天然紀念物調査報告，第5册，19. 10. 岡田喜一——朝比奈泰彥博士編，日本隱花植物圖鑑，1939. 11. 木通邦武——スキゼンジノリの細胞學的生理學的研究，1951.

◇スミス教授編輯藻類學論叢の紹介

曾つて蘚苔類及羊齒類の論叢を夫々刊行した F. Verdoorn の經營する米國 Waltham, Mass. の Chronica Botanica 社からそれらにつづく第三のものとして藻類が一册に纒つて出た (G. M. Smith (ed.), Manual of Phycology (1951))。375頁の內容の編輯樣式や裝綴は大體前著に似ていて，全 17 章と附錄 2 章とを 20 人の藻類學者が各自分擔執筆している。

藻類學史 (G. W. Prescott, ミシガン州立大學)，分類總論 (G. M. Smith, スタンフオード大學)，綠藻植物 (M. O. P. Iyengar, 印度マドラス大學)，ユーグレナ植物 (T. L. Jahn, 加州大學)，黃色植物 (F. E. Fritsch, ロンドン大學)，焰色植物 (H. W. Graham, 米國魚類野生動物保護局)，褐藻植物 (G. F. Papenfuss, 加州大學)，藍藻植物 (F. Drouet, シカゴ自然博物館)，紅藻植物 (K. M. Drew, マンチエスター大學)，化石藻類 (J. H. Johnson, コロラド鑛山學校)，細胞 (H. C. Bold, バンダービルト大學)，性 (G. M. Smith)，色素 (H. H. Strain, カーネギー研究所)，生理及生化學 (L. R. Blinks, ホプキンス臨海實驗所)，淡水藻の生態 (L. H. Tiffany, 西北大學)，海藻の生態 (J. Feldmann, パリ)，プランクトン (B. H. Ketchum, ウッヅホール海洋研究所)，培養 (E. G. Pringsheim, ケンブリッジ大學)，及びミクロ操作法 (D. A. Johansen, 加州)

一應整頓されて居り，一頁大の挿圖も文獻も大分擧げてあつて便利で手頃である。色素の處など新らしい。しかし挿圖は全體に古いものが多く (これは英米では書物から引用が法律的にやかましいために新らしい論文の圖を載せなかつたからではないかと思われるがどうか)，重要視される鞭毛の構造や硅藻殼の電子顯微鏡像など新らしい資料に簡單又は觸れず圖も一つも入つていないのはまずい。又分類の扱いの程度がまちまちで，藍藻は科を標準とする程に細いが屬を網羅せず，褐藻は目を基準としながらも屬のリスト迄に及び，紅藻や綠藻は目の分類が申譯にあるに過ぎないなどは甚だ不統一である。おまけに戰時中の出版物みたいに用紙の色が處々ボーゲンで違うなどは米國ともあろうものがみつともない話である。しかしそんな缺點にもかかわらず總括的な智識を得るにはよい本と思われるので一筆紹介する。定價 $7.50. (前川文夫)